日１３－７８

「さよなら渓谷」　　❄❄❄❄❄

２０１３（平成２５）年６月２９日鑑賞
<シネ・リーブル梅田>

監督・脚本：大森立嗣
原作：吉田修一『さよなら渓谷』（新潮文庫刊）
尾崎かなこ（レイプ事件被害者の「水谷夏美」）／真木よう子
尾崎俊介（レイプ事件犯人、かなこの夫）／大西信満
渡辺一彦（週刊誌記者）／大森南朋
小林（渡辺一彦の後輩、相棒）／鈴木杏
渡辺一彦の妻／鶴田真由
水谷夏美の元夫／井浦新
尾崎俊介の先輩、大企業の役員／新井浩文
刑事／木下ほうか
２０１３年・日本映画・１１６分
配給／ファントム・フィルム

<女優・真木よう子に注目！>
芥川賞作家、吉田修一の原作を映画化した李相日監督の『悪人』（１０年）は、先日亡くなった三國連太郎主演の『飢餓海峡』（６５年）と同じような殺人犯の逃亡劇だったが、私はその評論で「そんな名作の緊迫感に比べると、本作の逃亡劇は、純愛面が強調されていることの裏返しとして少し甘い」と書いた。しかし、陽気でかっこいい役が多い妻夫木聡が、複雑で内面的な演技に初挑戦したうえ、深津絵里は本来の演技達者ぶりを発揮していたから、なかなかの名作だった（『シネマルーム２５』２１０頁参照）。
本作も吉田修一の同名小説が原作だが、その複雑なヒロイン役を、２０１０年のＮＨＫ大河ドラマ『龍馬伝』のお龍役で圧倒的な存在感を示した真木よう子が７年ぶりに主演！タイトルは『さよなら渓谷』とかなり牧歌的（？）だが、その内容は「レイプ事件の加害者と被害者が１５年の歳月を経て夫婦のように暮らしている日常を描いた」というものだから、かなり過激そうだ。しかも、映画の冒頭は狭い部屋の畳の上で２人が絡み合う大胆なシーンで始まるから、ちょっとした純愛モノ鑑賞のつもりできたアベックはとまどうかも？

<『悪人』も良かったが、本作はそれ以上！>
尾崎かなこ（真木よう子）の夫・尾崎俊介役として登場するのは、例によって（？）セリフが少なく、その心の中を表情だけで表現するのが得意な俳優・大西信満。彼の芸達者ぶりは、彼が寺島しのぶを相手に『キャタピラー』（１０年）のなかで見せた、「四肢を失った軍神サマ」による過激な性愛ぶりを見ればよくわかる（『シネマルーム２５』２１５頁参照）。
もっとも、この冒頭のベッドシーンだけなら、昔の日活ロマンポルノでよく見たものだが、今２人が絡み合っている狭い団地の部屋の外には、多くの報道カメラマンや取材陣が集まっているのがミソ。これは、隣の家で発生した立花里美という母親による一人息子・立花萌（めぐむ）の殺害事件を取材するためのクルーだが、今日はその母親・里美が逮捕される日だから、その騒々しさはなかなかのものだ。２人はそれをまるで人ゴトのように（確かに人ゴトだが）無視しながら、クソ暑い夏の日に密閉された狭い部屋の中でセックスに励んでいたが、この夫婦だっていろいろ突ついていけば、隣家と同じように人には言えない問題を抱えているのでは？『悪人』も良かったが、そんな人間の内面に深く迫っていく本作は、それ以上！

<２人の取材によると、この男は？>
本作は『パレード』（１０年）、『悪人』『横道世之介』（１２年）などを監督した大森立嗣が監督をし、共同脚本を書いている。そして、本作の主演はあくまで真木よう子と大西信満だが、そのストーリーの進行役を務めるのが、大森立嗣の実弟である大森南朋だ。レイプ犯である尾崎俊介と、その被害者である尾崎かなこは、今なぜ夫婦として一緒に生活しているの？
そんな本作のテーマを週刊誌の記者として突撃取材し、問題提起していくのが大森南朋演ずる渡辺一彦だ。もっとも、彼の本来の取材の対象は殺人犯・立花里美だったはず。それが急遽俊介の取材に向かったのは、殺人犯として逮捕された里美と、お隣に住む俊介が「男女の関係」にあったという供述が里美から出てきたためだ。もちろん俊介は頑なにそれを否定したが、デスクから取材不足ぶりをどやしつけられた渡辺が俊介の過去を調べていくと、なんと彼は大学時代に野球部のメンバーたちと共に当時女子高生だった水谷夏美を集団レイプしていたという前科が判明したから、ビックリ！そうすると、ひょっとして隣家での殺人事件での実行犯は里美だとしても、その教唆犯はひょっとして里美と男女関係にあった俊介なのでは？警察がそう睨んだのと同じように、渡辺がそう考えたのは当然。そこで、さらに取材を進めていくと・・・。

<２人の取材によると、この女は？>
本作で面白いのは、渡辺の後輩で相棒の若い女性記者・小林（鈴木杏）が渡辺以上に足で稼いだ豊富な情報を集めていたことだ。渡辺の取材は俊介に限定されていたが、あのレイプ事件の被害者であった水谷夏美のその後の人生は？小林の取材によると、夏美は自らレイプ事件のことを告白したため一度は約束されていた幸せな結婚を棒に振るとともに、両親は離婚を余儀なくされたらしい。さらに、夏美は次の男との結婚生活でも、それを知った夫（井浦新）からドメスティックバイオレンス被害を受けるなどして病院への入院を余儀なくされ、今は行方も知れないらしい。あのレイプ事件以降、彼女はまるで、「不幸の連鎖」のような人生を余儀なくされたわけだ。なるほど、なるほど・・・。しかし、２人がさらに取材を進めていく中で、夏美は今も生きており、ある男と一緒に幸せそうに少年野球に興じている子供たちを見学している姿が目撃されたというニュースを聞くと・・・。
渡辺はこれまで何度も俊介に直接取材をしていたのに、なぜこんなことに気づかなかったの？すなわち、今は「かなこ」と名乗り、レイプ犯の俊介と共に暮らしている、あの女こそ、１５年前のレイプ事件の被害者「水谷夏美」なのでは・・・？しかし、なぜ？ホントにそんなことがありうるの？

<ここまで書いたところで、ビッグニュースが！>
６月２９日の土曜日にここまで書いて放置していたところ、翌６月３０日の日曜日にビッグニュースが入ってきた。それは、第３５回モスクワ国際映画祭のコンペティション部門で本作が審査員特別賞を受賞したとのニュースだ。モスクワ映画祭はカンヌ、ベルリン、ベネチアの３大映画祭に次ぐ世界的な映画祭の一つで、そこでの受賞は０８年に北野武監督が特別功労賞を受賞して以来だから、立派なものだ。
その受賞理由は「人間関係への深い理解と洗練された演出」が評価されたためらしい。これは本作に星５つをつけて、「『悪人』も良かったが、本作はそれ以上！」という見出しで本作の評論を書き始めたのと同じだから、モスクワ映画祭の審査員の目もなかなかのもの・・・？

<この「出会い」での、この間の抜けたセリフに注目！>
冒頭からみせる、かなこと俊介の夫婦関係はセックス面においてはうまくいっているようだが、それだって「愛情の発露」という感じではないうえ、２人の間にはハッキリ一定の「距離感」があることがわかる。したがって、きっとこの２人の夫婦関係は微妙・・・？２人はそれぞれその内面にどんな感情を持ってこんな日常生活を営み、なぜこんなむさぼるようなセックスに浸っているの？渡辺の後輩で相棒の女性記者・小林が取材した、「不幸の連鎖」のような人生を歩んでいる女・夏美の姿が登場してからは、本作はかなりシリアスな展開をみせていく。病的にやつれ、顔にキズを負った夏美が登場してくると、一瞬これは同じ真木よう子が演じているの？と思ってしまうほどだ。
夏美が夫からドメスティックバイオレンス被害に遭い、精神病院に入院していると聞いた俊介がその病院を見舞うのはいいのだが、そこで俊介が吐く「大丈夫ですか？」とのセリフは、その間抜けぶりで絶品！そんなセリフを、かつてのレイプの加害者から聞かされたレイプ被害者・夏美の反応はいかに・・・？

<この奇妙な男女の「二人旅」に注目！>
もっとも、俊介がガールフレンドと共にマンションの見学に来ているシーンを見ると、一応俊介もまともな社会人となり幸せな結婚を予定しているのかなと思ってしまう。しかし、本作中盤のハイライトは、夏美から俊介のケータイにかかってきた一本の電話をきっかけとして突如出現する奇妙な男女の「二人旅」だ。『悪人』では、終盤からクライマックスに至る２人の「逃避行」がハイライトだったが、本作では、「ついてこないで！」と何度も叫ばれながら、ずっと一定の距離をおいて夏美の後をついていく俊介の姿に注目！２人とも着の身着のままでの奇妙な男女の「二人旅」になったようだが、それでも雨が降ったら傘がいるし、腹が減ったら食事も必要。さらに、夜になればどうしてもどこかに泊まらなければならないが、さてこの奇妙な男女の「二人旅」におけるその様子は？
この奇妙な男女の「二人旅」が終わるのは、夏美が一人で歩道橋に立つシーンで見せる思わぬ展開によってだ。歩道橋の柵にもたれながら身を乗り出している夏美の姿を見ると、今にも飛び込み自殺をしそうだが、同時に夏美の視線は時々横の方に向いているが、それは一体なぜ？口ではあれほど強く「ついてこないで！」と俊介の事を拒否していながら、内心では・・・？しばらく経って俊介がそこに（再）登場（？）してきたところで夏美が吐くセリフは、「私はあんたが逃げたと思った。でも戻ってきて欲しかった」というもの。このセリフに込められた微妙な女心を読み解くにはかなりの恋愛経験や女性遍歴が必要だろうが、本作ではそんな思わぬ展開で終わる、奇妙な男女の「二人旅」に注目！

<なぜ、かなこはウソの告発を？>
犯罪の被疑者には「黙秘権」があるが、それを有効に機能させないのが警察の取調べのテクニック・・・？本作にみる刑事（木下ほうか）らによる俊介の取調べ風景を見ていると、ついそう思ってしまう。俊介が警察に逮捕されたのは、子供殺しの罪で逮捕された隣家の女・里美と俊介が男女関係にあった旨をかなこが警察に通報したためだ。それがウソだと知っているのは誰よりかなこ自身だが、かなこはなぜそんなウソのたれ込みを・・・？
１つ考えられるのは、これまで俊介と夫婦として生活してきたのは、どこかで俊介に復讐するチャンスをうかがっていたためだったこと。なるほど、それならここでウソのたれ込みをして、俊介を殺人の教唆犯として処罰させるチャンスと考えたことも納得できる。ところが、スクリーン上で見るかなこの様子を見ていると、どうもそんな単純なものではなさそうだ。弁護士生活４０年を迎えた私もそんな風にいろいろ理由を考えていたが、スクリーン上ではあっさりかなこが自分のたれ込みはウソだったと訂正したことによって、俊介は釈放されることになったからさらにビックリ。
こんなウソのたれ込みにふり回された警察はいい迷惑だが、それはさておき、本作では釈放されて家に戻ってきた俊介とかなこの会話に注目したい。妻によるウソのたれ込みによって何日も警察の取調べを受け、挙げ句の果ては妻の復讐心を思い知らされたためか、それとも警察官の取調べのテクニックに降参したためか、「隣の女性と男女関係にありました」とウソの供述までしてしまった俊介にしてみれば、怒りの対象は妻のかなこに向かうはずだが、さて俊介の対応は？さらに、釈放された警察署からまっすぐ我が家に戻ってきた俊介を迎えた、かなこの対応は？ここらの男女の機微を理解するにも、やはりかなりの恋愛経験が必要かも・・・？

<この決めゼリフに注目！これぞ本作の焦眉！>
映画『タイタニック』（９７年）の歴史に残る最高の名シーンは、タイタニック号の船首に立ち、海と空に向かって大きく両手を広げるローズの身体をジャックが後ろから支えるシーンだが、『ロミオとジュリエット』の最高の決めゼリフは、「おおロミオ、あなたはどうしてロミオなの？」というもの。その他、決めゼリフにはいろいろあるが、『ベニスの商人』のそれは、「肉１ポンドは切り取ってもよい。ただし、血は一滴も流してはならぬ」というものだ。そんな風に考えてみると、本作最高の決めゼリフは「私たちは幸せになるために一緒にいるんじゃない！」というものだ。
本作中盤で見せた奇妙な男女の「二人旅」は、どうも流れ流れて行きついた先での２人の結婚生活に結びついたらしい。そして今は、本作冒頭で見たような互いにむさぼり合う激しいセックスが２人の間でくり返されていたから男女関係とは不思議なものだ。外から見ていると、この２人は一見平凡で仲睦まじい夫婦生活を営んでいるようだが、さてその実態は・・・？そして、一度は何を血迷ったのか、かなこがウソのたれ込みを警察にしてしまったが、再び俊介が家に戻ってくると、また平凡な２人の夫婦生活が・・・？大きなヘルスセンターで温泉に浸かり、湯上がりにおいしそうにビールを飲んでいる２人の姿を見ると、仲睦まじい夫婦の典型のように見えるが、さてその実態は？「私たちは幸せになるために一緒にいるんじゃない！」という本作の「決めゼリフ」に注目しながら、それをじっくりと分析したい。

<この決めゼリフからいかなる結末へ？>
俊介が警察から釈放されて家に戻ってきたのは、新しい夫婦生活の再スタート。本作を観ていると誰もが一瞬そう思ってしまうが、実はそれは２人の「別れの始まり」だったらしい。それを見事に切り取ったセリフが、上記の本作最高の決めゼリフだ。少なくとも、レイプ被害者であるかなこがレイプ加害者の俊介と一緒に生活を始めたのは、幸せになるためではなかったことはまちがいない。ただ、レイプ被害者であることを知られただけで婚約者から婚約を破棄され、幸せな結婚を夢みて結婚してもその過去が明らかになると夫からひどい仕打ちを受けてしまったかなこにとって、少なくともそのレイプの加害者である俊介に対してだけはその秘密を隠す必要がなかったことはまちがいない。しかし、そんな男と一緒に生活しても幸せになれるはずはないのでは？
かなこにはそんなことは最初からわかっていたはずだし、それを求めたこともなかったはずだ。ところが実際に２人の結婚生活が始まってみると？そして、隣で起きた殺人事件に関連して夫が逮捕されたり、また帰ってきたりすると・・・？レイプ加害者の男と一緒に生活している中でも、セックスは男と女の欲望だからＯＫだが、少しでも今の生活を幸せと思ってしまう気持が生まれてくると・・・？本作に見るそんな決めゼリフに注目しつつ、さてそこから必然的に導かれる、本作の結末は？お世辞にも上手いとは言えないが、椎名林檎が提供した楽曲を歌う真木よう子の美声（？）に耳を傾けながら、余韻を残すその結末をじっくりとかみしめたい。

２０１３（平成２５）年７月４日記